HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	講座（4） まちつむぎ ： 手から手，人から人
著者	岡本，浩一；OKAMOTO，Koichi
引用	北海学園大学学園論集(147)：249-264
発行日	2011-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

《シンポジウム》 2010 年度　北海学園大学市民公開講座

講座(4)　まちつむぎ―手から手，人から人―

岡　本　浩　一

0．はじめに

工学部の岡本と申します。よろしくお願いいたします。私は,「まちつむぎ，―手から手，人から人―」というテーマで講演させていただきます。まだ民間企業からこちらの職場に移って時間が短く，現在 4 年目を過ごしているところです。一般の皆様にお話しするのは，この講座が初めてなので，ちょっと緊張しています。お聞き苦しいところもあるかも知れませんが，よろしくお願いします。

パワーポイントを中心にお話ししていきます。今日のお話のプログラムは，まちの予備知識から始めて，まちつむぎ，まちづくりが地域になじむ姿，まちつむぎ考，そして，まちはひと，という順番です。皆様にお配りしたテキストは，３章のまちづくりが地域になじむ姿の事例に該当するとお考えください。

1．まちの予備知識

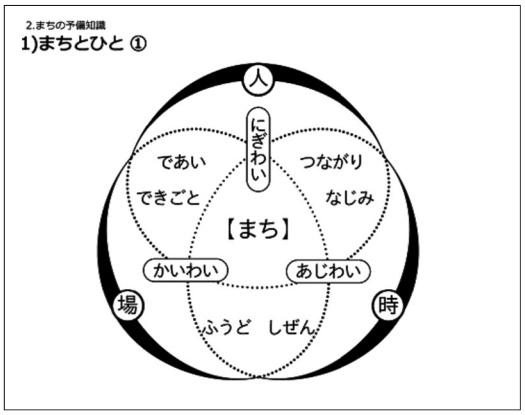
1－1．まちとひと

まちとひとの関係について，少しわかりやすい図ができないものかと思って作ったのがこちらです（スライド 01)。

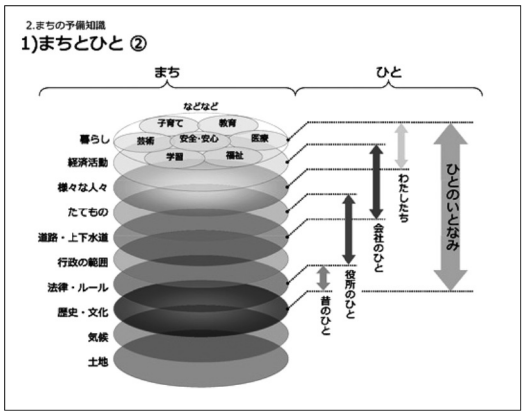
まちというのは，場所があって，時間が流れているわけですが，そこに人がいてこそ，にぎわい，かいわい，あじわいというような，様々な魅力が発生してくると思われます。

人と場所と時間の間に，であい，できごと，つながり，なじみ，あるいは，ふうどやしぜんというものも，入っていると整理できます。

もう少し,「まち」について分解してみると(ス



スライド 01



スライド 02

スライド 03

ライド 02)，ちょっと情報量が多いのですが，一番下の土地から始まって，その上に気候，歴史や文化，法律やルールと重なり，その上に行政の範囲，道路･上下水道があります。さらにその上に，たてもの，そして人びとの暮らす様子があると描けます。幾つかの階層で，特に関わりの深い人びとがあります。例えば，法律やルールから都市を動かしている道路や上下水道，たてものの性能までは，役所の人がおもに目を配っています。その上のたてものを造ったり，ものを売ったりする経済活動の階層には，会社･企業の人たちが関係しています。さらにその上に，私たちが暮らしていると理解出来ると思います。

１－２．まちの歩んだみち

まちの予備知識の 2 番目として，まちの歩んだみちを整理します。私よりも会場の皆様方が，よくご存じのことと思いますが，振り返っておきたいと思います（スライド 03)。

高度経済成長を経験して，日本は「まち」と「ひと」の 2 つの側面に於いて，大きく変化を遂げてきました。「まち」については，経済の成長を背景に，人や物の移動の増加，あるいは移動範囲の拡大が生じました。「ひと」については，国民の所得が向上し，人口が増えるという様子が生まれました。これらの背景として，自動車中心社会が成立したことがあります。

このときに，古いまち，古くからのまち，特に本州ですと，歴史のあるまちというのは，身近な暮らしを支える生活道路は細くて，城下町などは敵の侵入をさまたげるため，道を真っ直ぐには造らなかったわけです。そこに自動車が中心に利用する道路という機能が入ってきたとき，どうしても使いにくいうえ，土地が細分化して所有者も複数ありましたから，改善もままならない状況がありました。

古くからのまちを，自動車対応に直すことも考えられましたが，経済状況に勢いがありましたから，新しい土地に新しいまちを造る動きが起きました。もちろん人が増えてしまって，受け入れきれないという事実もありましたし，東京などの大都市であれば，各鉄道会社が乗降客を確保

するため，郊外へ大規模な住宅地を造成する様子もあったわけです。このようにして，新しい土地に新しいまちを造るという動きが広がりました。

結果として，古くからのまちにそもそもあった，歩いて暮らせるような便利さとか，ひとの繋がりやあたたかさのようなもの，環境と共存した知恵のある暮らし，祭や年中行事等の歴史や文化というものを置き去りにしてきたと考えることが出来ます。

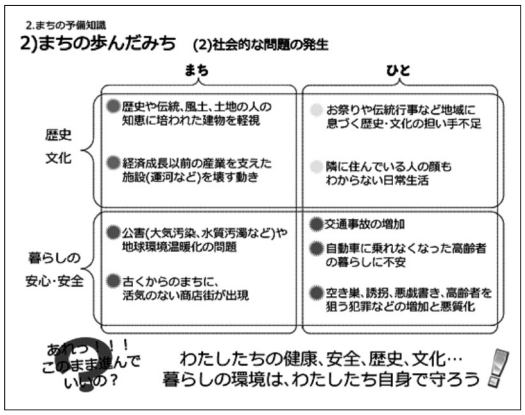
これらの変化がそれぞれどんな問題を生み出したかについて，ひとつひとつ取り上げて説明することは省略しますが，まちの観点とひとの観点から見返すと，歴史／文化の面と，暮らしの安心･安全の面で，大きく様々な問題が出てきたと理解できるように思います（スライド 04）。交通事故が増えたり，歴史あるものを壊すような動きが，世の中に広まっていった様子は，皆様も記憶を辿られるとたくさん思い出されることと思います。

１－３．まちづくりの誕生と発展

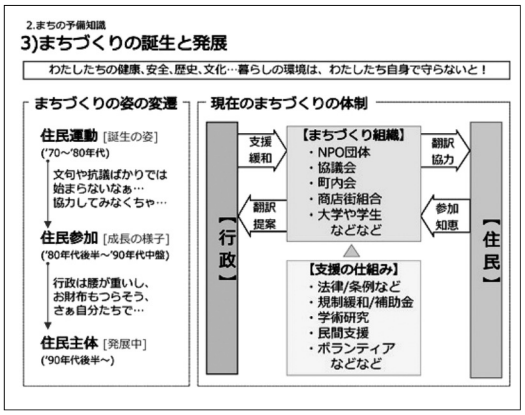
そのような世の中の動きから，「私たちの暮らしを支えるまちは，このままでよいのか」という問題意識が出てきます。このときに，私たちの健康，安全，歴史，今回の公開講座のテーマである文化も，自分たちの周りのことは，自分たち自身で守らなければならなさそうだという様子が生まれます。ここから，まちづくりという言葉，まちづくりの動きというのが誕生しました（スライド 05）。

1970 年代から 1980 年代，公共の福祉と経済の発展を前提に，国･行政が中心となり，大きくまちの様子を変えていく流れがありました。もちろん，それは国の成長･活力を伸ばす必要性から，まちを造りかえるという動きだったのですが，結果として公害が発生したり，交通事故が増えたり，経済成長を優先したことによるさまざまな弊害が出てきて，それに対する住民運動というかたちで，まちづくりが生まれてきたと言えます。

その後，1980 年代の後半から 1990 年代中盤にかけては，ただ行政と対立していてもなかなか上



スライド 04



スライド 05

手く進まないので，自分たちも一緒に取組む意識が芽生え，住民参加の構図が生まれました。そして今は，住民主体と住民参加の両方があるような状況と整理できます。

現在のまちづくりの体制というのを，右側に載せましたが，住民運動の時代は，行政と住民という二項対立であった部分があると思います。しかし現在は，まちづくりの組織が間に入り，お互いに言っていることを翻訳する役割を担って，よりスムーズに自分たちの考えを，カタチにまとめる，実現化するという仕組みが出来てきている様子があります。

以上，まちの予備知識として，都市の歴史を簡単にかいつまんでお話ししました。

2．まちつむぎ

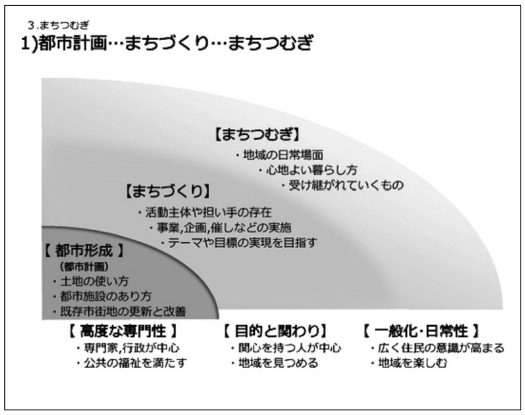
2－1．都市計画…まちづくり…まちつむぎ

まちづくりがどのように動いているのかというところ，その仕組みの部分まで来ましたが，次に「まちつむぎ」です。もう少し中身について，お話ししていきたいと思います。

「まちつむぎ」というのは，一般的な言葉ではありません。今回のこの公開講座で，少しでも皆様の理解を深められればと思って，考えてみた言葉です（スライド06)。

都市計画とまちづくりとまちつむぎを，言葉として出してみました。まず，都市計画というのは，これからのまちはどうあるべきかとか，どんな風に土地を使っていったらよいのかという条件整理，環境を整備するための下地を造っていく部分だとお考えいただければと思います。１つは土地の使い方，２つめは都市施設といわれる公園や緑地，道路や公共施設，都市の全体を支える施設のあり方，３つめは既存の市街地の更新と改善，この３つが都市計画の手段と整理されています。使いやすいまち，暮らしやすいまち，安全なまちにするための下地を準備するわけです。

そこには高度な専門性が必要になりますから，専門家や行政が中心となって物事を動かしていきます。一部地域が極端に潤うとか，手厚く面倒を見てもらえるという様子ではなく，公共の福祉という観点から，まちのつくり方を検討するのが都市形成･都市計画であると整理することが出来ます。



スライド06

それを受けて，それぞれの地域でまちをつくっていくことが必要になります。どんなまちにしたいのかとか，今どういう問題があってそれをどういう風に解決していかなければならないのかというところに，具体的に切り込んでいく様子を「まちづくり」と表現できると考えます。活動主体や担い手が存在して，目標があって，目標とするまちの姿を実現するため，こんな活動をするんだという一連の繋がりのもと，目的と関わりを持って地域に活動が生まれて，

展開していくという様子をまちづくりと整理できると思うのです。

さらにその先については，同じまちづくりの範疇なのですが，「まちつむぎ」と表現した方が，全体像をつかみやすいのではないかなと考えています。まちづくりでは，まちに対するいろいろな活動が展開していくわけですけれど，一部の関心のある人たちが活発に動いていくという有り様ではなくて，もっと日常的な，自律して地域の人たちの中に馴染んでいく，その活動が暮らしに溶け込んでいくことを，今回はまちつむぎと表現してお話ししていきたいと思っています。

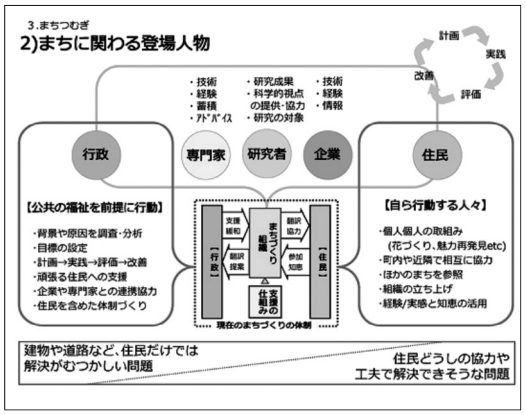
なんらかの目標があって，こういうことがしたいからみんなで頑張ろうではなく，もうすでに，生活の一部となって，まちの潤いとか，まちのよさ･魅力をかたちづくり，受け継がれていく様子という部分が，これからのまちづくりの展開に大きな存在感を示していくと理解できるのではないでしょうか。

２－２．まちに関わる登場人物

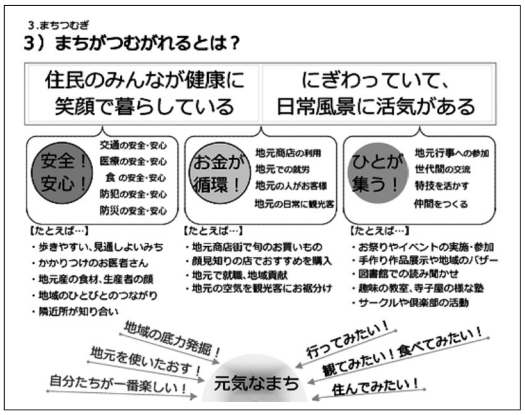
実際まちに関わっている人たちには，どういう人たちがいるのかを整理します（スライド 07)。行政がいて，専門家や研究者や企業がいて，住民がいるという，大きく５つの役者が考えられるかと思います。このなかには，NPO 団体など専門家と研究者の間に入るような存在も考えられます。この人たちが，実際にまちを造ったり，まちを楽しんだり，まちを使いこなしたりするわけです。

２－３．まちがつむがれるとは？

では，まちがつむがれるということは，どういうことなのかという点を，もう少し説明してみます(スライド 08)。まちの大きさとか人口密度とかの違いによって，差違があるとは思いますが，住民のみんなが健康に笑顔で暮らしている様子と，にぎわいがあって日常風景に活気がある様子，基本的にはこの２つが満たされていると，その土地で有意義に暮らしていけると考えられます。



スライド 07



スライド 08

まちがつむがれることを支えるものとして，安心･安全であったり，地域の中でお金が循環するシステムであったり，ひとが集まってきていろいろなことを一緒に楽しむという3つがあります。このそれぞれには，細かな内容が含まれていて，交通や医療や食の安全，地元商店の経済活動，観光客を呼び込む，いろいろな切口があると思うのですが，大きくは，安全･安心，お金の循環，ひとが集うの3つに整理できるかと思います。

これらが上手に絡み合うと，地域の底力が見えてきたり，そこに暮らす自分たちが一番楽むことができ，その周りの人たちは，行ってみたいとか，観てみたいとか，食べてみたいと，その土地を訪れるきっかけが生まれます。ややもすれば，住んでみたいと感じられて，さらに人が集まってくるということも考えられます。

3．まちづくりが地域になじむ姿

では具体的に，まちづくりが地域になじむ姿というのを考えていきます。テキストを見ていただきたいのですが，その中には8つほどの事例を載せてあります。ひとつのテーマに写真をひとつくらいのかたちで入れているのですが，このなかに載せているのは，先ほど，まちをつむいでいくという部分で，ひとが地域を楽しむとか活かすという側面に魅力やちからを持っている事例です。

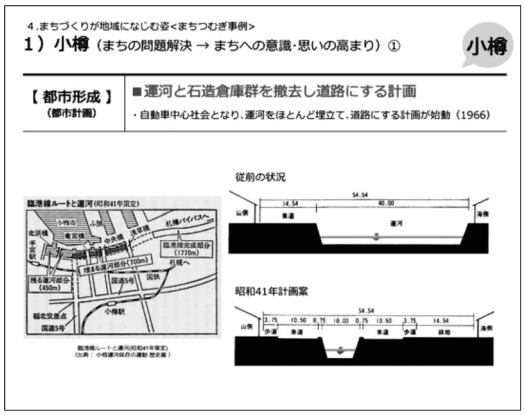
このほか，テキストに載っていないですが大切な側面として，地域の福祉，地域の防災，地域の安全･安心の取組みというようなことがあります。現状のまちにプラスアルファするという取組みではなく，共通に確保されていることが望ましい側面に働きかけることです。福祉，防災，安全･安心という，どの人たちも平等に享受できることが望ましい側面に関するまちづくりの活動は，このテキストには入れていません。あくまでも，プラスアルファの部分に限って，どのような活動があるのかが載っていると，理解いただければと思います。

3－1．小樽

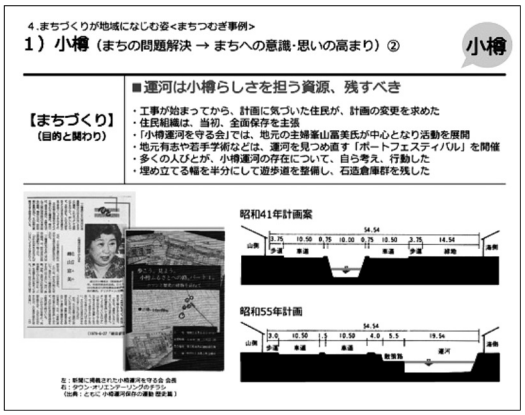
では，まちづくりが地域になじむ姿ということで，小樽と恵庭の例を少し詳しく観ていきます。まず，小樽です。

小樽の事例は，私なんかよりも皆様方がよくご存知だと思われますが，振り返っていきたいと思います。小樽運河と石造倉庫群の保存運動を経て，まちを活かして守りながら育てていくという取組みに展開しています。

最初に，小樽運河を埋めて，石造倉庫群を壊し，道路にしましょうという動きは，都市形成の視点から取組まれたわけです(スライド09)。右側にある図面の上の方，これは，埋め立てられる前の小樽運河の断面状況です。40 m幅の運河があって，その脇に約15 m幅の車道があるのがわかります。昭和41年の計画で，左側に載せてある地図の黒くなっている部分，ここを埋めて，道路にしてしまいましょうとなりました。断面図としては，右側の下にあるようなかたちです。約



スライド 09



スライド 10

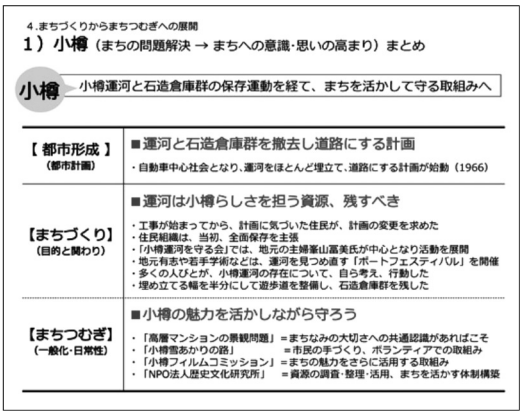
10 m 幅の車道に挟まれるように 10 m 幅の水面を残すものの，それまで 40 m あった運河の幅を 10 m まで圧縮してしまおうという計画だったわけです。この計画のもとで，実際に工事が始まります。

基本的には，必要とされている都市計画の手続きは踏まれていたわけです。こんな計画を実施するので，市民の皆さんどう思いますかと，役所で計画案を提示して住民への縦覧を行い，全て決められた手続き通りやったわけです。けれども，今もその続きは厳然と残っていますが，多くの人はそんなことがあっても，大して見に行ったりはしないと思います。わざわざ役所に行って。特別関心があれば，見に行くのかも知れませんが。

小樽でも，実際に倉庫群が壊され始めてから，「なんかおかしいんじゃないか」という話になって，住民が組織を立ち上げて全面保存すべきだと主張したわけです。壊すのではなくて，壊さなくとも何かいろいろ工夫すれば，もしかしたら地下に通すとか，いろんな対策を採れるのではないか。小樽の特徴的な景観を担っていて，小樽の魅力を，小樽の歴史を育んできた運河は壊さなくてもいいのではないか。そういうことを主張していたんですが，行政も住民組織もお互いに折れないという状況がしばらく続きました。そのあと，北大の若手研究者や学生が入ったり，地元の有志の若者たちが動き出したりして，「そもそも運河って言うのは，小樽にとってなんなのでしょうね」と問い直すような活動が広がるわけです（スライド 10）。

皆様もご存知のことと思われますが，ポートフェスティバルという名前で，お祭りの形式を利用し，いろいろなひとを小樽のまちなかに呼び込み，運河周辺を楽しんでみる動きもありました。そのなかで，運河の魅力をもう一度確認しながら，どういう風にしていったらよいのかを考える気運を盛り上げようという動きになったわけです。左側に載せているような，当時，小樽運河を守る会会長の峰山さんらは，各種メディアに取り上げられました。国と掛け合ったり，いろいろなお話しをされたり，地元の有志が様々な企画に取組んだりしました。タウン・オリエンテーリングという，まちなかの魅力を探してみようという活動なども展開されてきたわけです。

スライド 11



スライド 12

このように様々な人が関わり多面的な動きを経て，現在のかたち，昭和 55 年計画という 40 m 幅の運河を半分残して，残り部分に車道と散策路を造り，運河の存在を積極的に活用する，ひとつの回答に至ったわけです。

では現在，小樽はどうなっているかというと(スライド 11)，最近は観光客の入り込み数が少しずつ落ちてきているという話を聞いたりもします。しかしそんななかでも，まちに暮らす人たちは，左下の写真にあるような歴史的な建物の後ろにマンションが建ち上がってしまう，そんなまちの変化に問題を提起して，マンション論争を起こしたり，地域の人たちが中心になって楽しむ雪明かりの路という全国的に注目される活動を展開したり，NPO 法人歴史文化研究所を 10 年くらい前に設立して，小樽学という，多くの地域で生まれている地域学などを展開しつつ，地域の歴史資源を再活用する動きを始めたりしています。

運河を対象にして，いろいろな取組みをしてきたことが素地となり，現在は，住民の人たちが小樽の歴史や景観って本当は大切なんだということに気づいたわけです。そこから，まちと人の関係に豊かな広がりが生まれています。この様子を「まちつむぎ」と整理すると理解しやすいと思われます。

これまでの小樽の流れをザックリ整理すると(スライド 12)，経済成長に対応する行政の動きがあって，その影響として歴史資源を失っていくということに疑問を持ちつつ，地域性･歴史性を再認識しなければいけないのではという一部の住民の動きが生まれます。それを踏まえて，現状では小樽らしさを守り，その魅力を活かすために何が出来るのかという，最初は一部の人たちの動きや意識であったことが，今は地域の人たち全体の意識の変革とか，経済などまちの元気をより具体化していくための取組みに繋がっていると整理できると思います。

３－２．恵庭

次に恵庭の事例をご紹介します。恵庭は，恵み野地区のお話です。恵み野地区を代表として恵

庭市は，戸建住宅地の花づくりで，全国的に非常に名前を馳せている，有名になっている様子があります。これはひとりの主婦の感動が地域に広がって，今や全道へ展開しているという動きです。非常に注目に値するものであると思うので，これまでの様子を振り返りながら見ていきたいと思います。

都市形成・都市計画の部分としてまず，ニュータウン恵み野が 1980 年代に造成されます。造成の開始から完了まで 1980 年～1990 年の約 10 年かかっています。造成開始前の 10 年間には，いろいろな下準備がされました。分譲開始から約 20 年を経て，ここにあるようなたくさんの戸建住宅を中心とする住宅群・住宅地が形成されています。そのなかでも研究村通と呼ばれるところは，特に敷地面積をゆったりと造って，緑を配置し，恵み野地域を代表する住宅地の通りにしようと計画された部分です（スライド 13）。

まちづくりとしては，ひとりの主婦の感動が花づくりに新たな展開を生むと書いていますが，恵庭では 1960 年代くらいから，恵み野地区と関係なく，花いっぱい文化協会という市民有志による活動が連綿とされてきたという背景がまずあります（スライド 14）。

1990 年に市政 20 周年として，記念事業がおこなわれるわけですが，このときに市民の有志の方と役所の方が，花いっぱい文化協会の活動を受けるなどして，ニュージーランドのクライストチャーチでおこなわれるガーデニング・コンテストなどを視察してこられたわけです。その様子が市政 20 周年記念事業の時に紹介されます。このガーデニングコンテストの紹介を目にしたひとりの主婦が心から感動して，感動したその年のうちに恵み野花づくり愛好会を立ち上げます。

「花を通じて，自分たちの暮らし・日常に潤いを持ちたい」と，当初はひとりで感動をそのまま愛好会というかたちにしたわけですが，すぐに地元の商店会などにも声をかけられて，花を植えることを中心に様々な活動を展開してこられるわけです。

また，恵み野花づくり愛好会が組織として活動を展開していくのとは別に，苗とか種をお隣さん同士でお裾分けしたりするなどの様子も生まれました。地域の人の繋がりも同時進行となって，

スライド 13

スライド 14

スライド 15

恵み野地区全域に花づくりが広がる様子がありました。最初に恵み野花づくり愛好会を立ち上げた内倉さんという女性は，現在，中央の写真にある珈琲店を経営する傍ら，様々な活動を継続されています。

右の写真は，恵み野に近いところにある花苗生産の農家です。こちらでも，敷地内にある農家経営者の自宅の一部を喫茶店に改造して，花を楽しみながら食事が出来る空間を設えています。ここまでは，まちづくりの活動の部分と考えられます。

では，まちつむぎの側面，自律して広がっていくという様子は，どうなっているのかというと，住民それぞれが暮らしの潤い癒やし，気持ちよさを大切にする中で，地域の風景が彩られる姿として展開しています（スライド 15)。

具体的には，「オープンガーデン」というものです。最近，ローカル局のワイドショーなどでも取り上げられています。自分で造った自分の家の美しい庭を，いろんな人に見てもらいたいという動きです。オープンガーデンをされているお宅の都合のつく曜日や時間，駐車場の有無などがきちんと情報整理された冊子になっています。例えば，ウィークデーのお昼過ぎくらいまでは見に来られてもよいですよとか，何曜日と何曜日の何時から何時まではお庭を開放しますよとか，個人のお宅の庭をみなさんに開放してみていただく動きです。花づくりが地域に広がって，自分の庭をみなさんに見てもらいたいと考える人が出てくるまでになっているわけです。

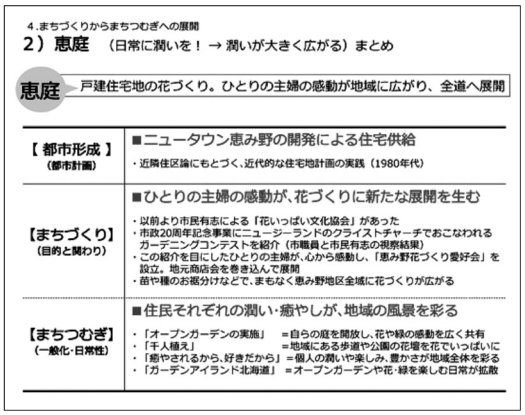
ほかには，「千人植え」といって，地域の皆さんが地域にある歩道や道路，公園の花壇，これらに花を植えていく活動があります。ごく普通の町内会でも取組まれていることだと思うのですが，名前がつけられて，一種イベントというか地域の特色を担うものとして認識され，地域の恒例行事となる様子があります。

個人個人の気持ちとして，花が好きだからとか，癒やされるからとか，個人の楽しみが広がりを見せていることが非常に重要だと思うのです。さらに，ガーデンアイランド北海道という展開があります。北海道には，通常であれば時期をずらしながら咲く様々な花が，同じ時期に一斉に咲き始めるという特徴があります。その特徴を，クライストチャーチから恵み野を視察しに来られた人たちが再発見して，非常に注目したそうです。花という切口からみると，北海道にはこの土地特有の「花を楽しみやすい風土」があるわけです。

この再発見から，全道へ花づくりを広げることが地域全体の楽しみや潤いになりそうだと，花づくり活動を最初に始めた内倉さんらが気づきました。北海道全体を，緑と花に包まれる美しい庭に見立てることが，暮らしの潤いや楽しみをさらに広げると考えて，ガーデンアイランド北海

道という活動を始めて，本も出版されています。

整理すると，住宅供給という都市を造る動きがあって，そこに花のある暮らしに感動する個人の心の動きがありました。これを契機に花づくりという活動が，まちづくりとして地域に広がるわけですが，現在は花づくりの活動という枠を超えてしまい，花と一緒に暮らすこと自体が自分たちの心の潤いになるのであって，まちづくりだから花をつくる・育てるという活動では既にないのです。



スライド 16

個人の感動が，複数の人たちの日常に溶け込んだわけです。オープンガーデン北海道の冊子には，今や恵庭の恵み野地区に留まらず，全道各地のオープンガーデンが紹介されています。北海道全体にまで広がりつつある様子が，まちつむぎであると整理すると，わかりやすいと思います。(スライド 16)。

このほかにもいくつかの事例をテキストに掲載してありますので，ご覧いただければと思います。テキストに掲載しているものも，ほんの，ほんの一部です。極々，近いところで思い起こすと，今月 (2010 年 10 月) 号の広報さっぽろには，4～5 頁あたりに東区元町のまちづくりの取組みが掲載されていました。

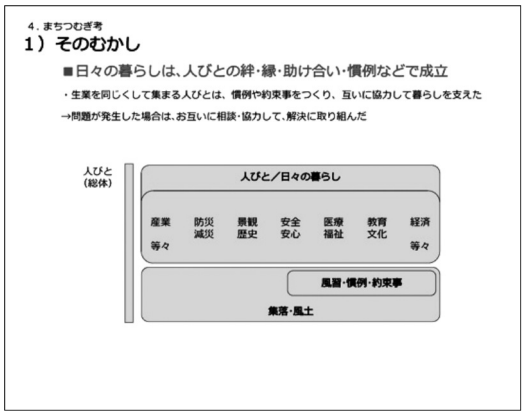
何か，明確な順番，これが起きて，これが起きて，その後これが起きてというのは，後から見て整理することであって，まちづくりというのは，地域の中で脈々と広がりながら変化をして動いているものですから，逆に言うと，テキストにまとまっているものは古いということも出来なくはないわけです。様々に日常的に展開されているので，身近な広報ひとつとっても，いろいろな動きが見られるのではないかなと思っています。

4．まちつむぎ考

まちつむぎというキーワードでお話ししてきましたが，この場でなるべく伝えやすくしようと考えて表現した言葉ですので，もう少し整理してみたいと思います。

4－1．そのむかし

その昔，人びとの暮らしというのは，集落とか風土のような暮らしの環境という前提があって，その中から成立した風習や慣例や約束事がありました。それらをベースにして，キーワードを入れてみましたが，産業から始まって，防災・減災，景観・歴史，安全・安心，医療・福祉，教育・文化，経済などなどなどが渾然一体に，人びとの日々の暮らしを支えてきたと考えられます（スライド 17)。何か問題が発生したときには，お互いに相談して，協力して，解決していったという様子が



スライド 17

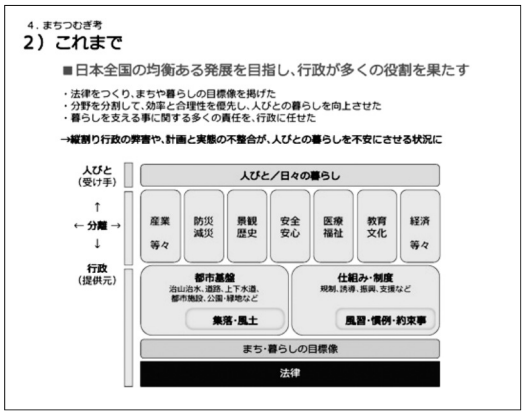
ありました。これはその昔の話です。

4－2．これまで

その昔を経て，これまでになると，行政という役割分担が発生して，行政が担うべき事が明確になり，まちを造っていくという視点が生まれて，様子が変わるわけです。

日本全体の均衡ある発展を目指して，行政は様々な役割を果たしてきました。先ほどお伝えした，集落とか風土，あるいは風習や慣例や約束事というのは，それぞれ都市基盤と仕組み・制度というものに内包されて，少し大きな視点で整理しながら，ものを造っていく構造になりました。造るものがどのように活かされるのかを検討しながら，それらを動かしていくための仕組みや制度が必要だという，２つの大きな塊に分かれたと考えられます。この下には，法治国家という大前提として，法律が存在します。取り立てて，暮らしについて言えば，まちとか暮らしの目標像をたて，その上で都市の基盤をどのように造っていかなければならないのか，仕組みや制度をどのように運営していかなければならないのかなどが考えられてきたわけです。

さらに，その昔には渾然一体としていた産業から経済等さまざまな事柄が，縦割りに分割されました。産業は産業で対策を練るし，防災・減災はまた別の切口で考えるし，景観とか歴史もまた別の切口です。景観や歴史などは，どちらかというと最初のうちは，あまり考えられなかった部分になると思われます。安全・安心なんていうことは，ここ数年やっと本気さが増してきて，地域独自に考えなくてはどうにもなりそうにないという危機意識が盛り上がりつつあるものです。医療・福祉についても，様々な仕組みが試されていますが，やはり地域の人たちの力がないと，なかなか上手く回らなさそうだなという様子も見えてきていると思います。



スライド 18

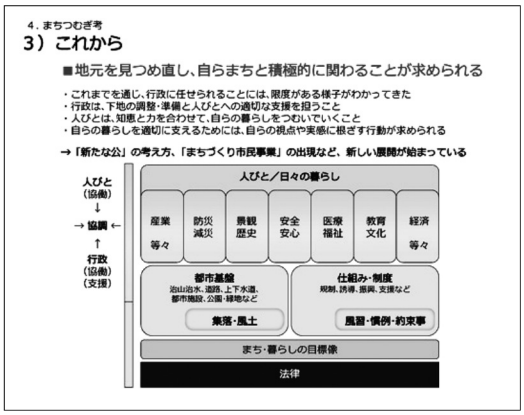
このような縦割り行政という様子が，結果的に，「こんなまちにしたい」と言っても，縦割りで取組むものですから，目標像と実態が合わなくなってしまう。このことから，人びとの暮らしを不安にさせてる状況も出てきてしまっているわけです（スライド 18)。

4－3．これから

今までの様子を踏まえて，今後どうするのか

というところですが，やはり，地元を見つめ直して，そこに暮らす人びとが，自らまちと積極的に関わることが大切になります。

行政に任せられることには限界がありそうだということは，なんとなく人びとが感じていると思います。注文をつけるにしても何にしても，得意不得意があったりとか，できるできないという話ではないのですが，行政が担うべきところと，行政が手を広げすぎているところとに，歪みがあると思うのです。



スライド 19

手を広げすぎているところは，自分たちが関わった方が上手く回るのではないのかという，素朴な疑問が出てきていると思うのです。

今，行政は下地の準備とか調整という本来担うべき基本的な面，人びとが活動するのを適切に支援する方策を模索している状況にあるようです。その現れとして，「新しい公共」とか「まちづくり市民事業」というようなキーワードと動きが見られています。

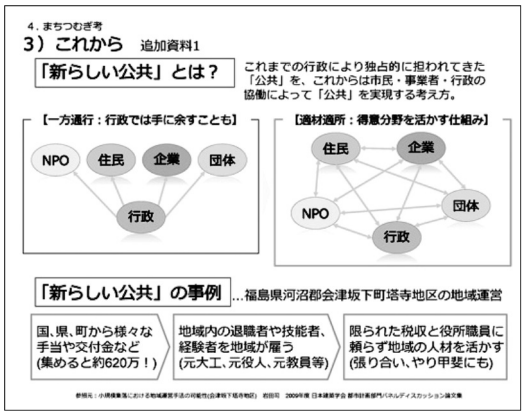
現在は，集落，風土，風習，慣例や約束事というもの，あるいはそれら相互の関連は薄まっています。しかし，それらについて，もう一度少し考え直しながら，縦割りになってしまっている部分に向けて，地域の人びとが「地元の様子っていうのは実際のところこうなんだよ」ということをきちっと伝えることが必要です。

実情を伝えることを通じて，縦割りを横に繋げていく，接着剤的な役割を果たす必要があると思うのです。縦割りが悪いというよりも，縦割りだけにさせないために，自分たちが接着剤の機能と役割を担い，繋げていくことが出来るのではないかと考えて，行動する時期に来ていると思います。

地域や暮らしの実情・実態を伝えることによって，「現在は別々に取組まれているあれとこれを，絡め合わせて取組む方がうまくいきそうだ」というのが見えてくるのだろうと思います（スライド 19)。こういったことを踏まえながら，新たな動きが出てきているわけですが，「これから」の追加資料として幾つか用意しました。

1）新しい公共

「新しい公共」という考え方は，ここ数年，活発に議論されながら，いろいろな試行錯誤が続けられつつ，動いているものです(スライド 20)。行政だけではうまくいかない状況があるなか，行政が発信元となって，「新しい公共」を提示しています。「自分たち中心でやってきましたが，うまくいきませんでした」とおおっぴらに言うわけにはいきませんから，「地域の人たちのニーズを地域の人たちが見つけ出すことによって，より有効な社会サービスが成立するのです」という言



スライド 20

い方で提言しているわけです。

うまくいかなかった部分は，地元の人の声を聞くだけでなく，地元の人の協力のもと，一緒にかたちづくる，仕組みづくることが出来ていなかったからなのだと思います。

今までは左側の図にあるような，行政が支援したり，注文されて対応したりというかたちであったと思うのですが，これからは行政もその一部に加わって，それぞれができることを，もちろん得意不得意があると思いますが，得意分野を活かしながら，不得意分野を補い合いながら，まちを造っていく仕立てが，新しい公共と呼ばれています。

考え方だけみてもよくわからないので，新しい公共の事例をひとつだけ挙げておきます。福島県河沼郡会津坂下町塔寺地区です。

ここでは，国，県，町から様々な手当や交付金などを受けています。例えば，消防団の活動支援に援助金とか，福祉関係の活動主体に補助金とか，町内会の青年部や女性部になんらかの助成金みたいなものなどが入ってきています。小さい地域なのですが，それをかき集めると総額で620万円くらいになったそうです。こういうお金がバラバラに別々に使われていたというのは，うまくないのではないかと考えられました。

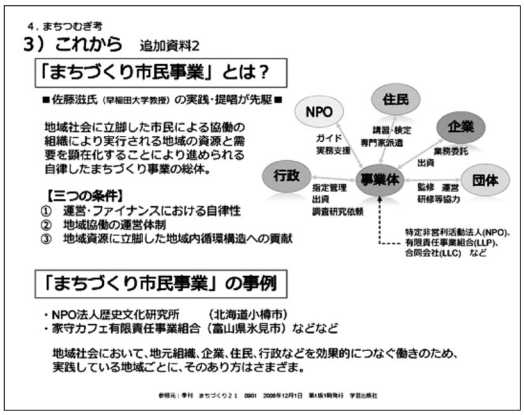
一方で，地域の中には，退職された方とか，特定の技能を持つ方とか，様々な経験を持つ方たちがいらっしゃるわけです。例えば，元大工，元役人，元教員などなど，そういう人たちに，お小遣い程度になるかも知れないですが，地域の面倒を見てもらう役割分担をしてみる。620万円を誰かひとりにがつんと支払うのではなく，お小遣い程度でもお支払いして，できることをやってもらう。小さな規模の集落なので税収の面でも限られていますし，役場職員も数が少ない状況があるわけです。そういう手の届きにくい部分に，地域の人材を活用し，まちを運営する姿です。

例えばでいうと，部屋の電気が切れたけれど，高いところの作業は怪我を考えると出来ないから代わりにやってもらうとか，庭の手入れや草刈りなども，実は高齢の体ではかなりの負担なので，代わりにやってもらうとか，日常の小さな困りごとに，地域の人たちが互いにできる範囲で対処しています。

これは，一線から退いた地域の人たちの生き甲斐や，やり甲斐にも繋がることで，新しい公共のひとつの事例と考えることが出来ます。かたちや仕組み，概念の話だけではなくて，お金の集め方もきちんと考えましょうということが今後必要になってきます。

2）まちづくり市民事業

最後に，まちづくり市民事業をお伝えします。こちらも新しい動きです。早稲田大学の佐藤滋先生が実践・提唱されていて，佐藤先生の取組みが先駆と言われています。



スライド 21

自分たちでお金を集めて，地域の人たちが互いに手を取り合い，地元企業や組織とも手を取り合って協力しながら，まちと付き合う様子です。観光客相手など外向きの活動を中心にせず，地域の資源を見つめ直して，住み続けたいまちの実現を目標に，それらを活かしていく。まちに内側から活気を取り戻すことを目指す仕組みが，まちづくり市民事業と呼ばれています（スライド 21）。

事業ですから，お金の流れも含むかたちで実践されます。市民事業を担う事業体は，NPO 法人や有限責任事業組合（LLP），合同会社（LLC）などの組織形態が多いようです。

例えば行政との関係では，地域の歴史資源をリストアップして，歴史資源の老朽化度合いなどを専門家と一緒に調査する調査研究の依頼を受けるとか，地域固有の資源である歴史的建物の指定管理を担当するなどして，行政からお金をもらう繋がりがあります。

あるいは，住民の皆さんとの関係であれば，地域の歴史や文化について有料の講習会などを開いたり，地域検定の試験を実施したり，ここにもお金の流れは考え合わされています。このように様々な形を取りながら，地域に根付いた資源を有効に活用することを念頭に，地域の人たち相互の Give & Take による関係が考えられています。「まちに必要だから」と関心のつよい人たちだけが，一方的に何かをするのではなく，やってほしいことをお互いに取組むことを通じて，まちをよくしていくという動きになっています。

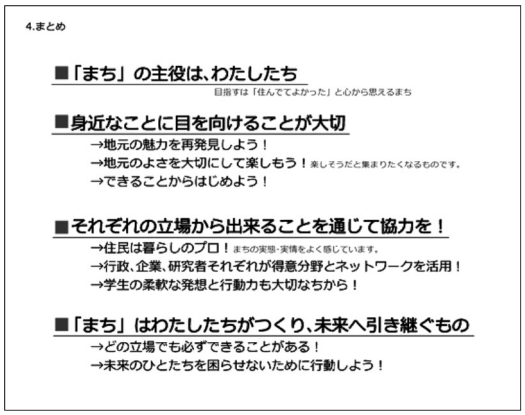
事例は全国的に様々出てきているのですが，小樽で活動している NPO 法人歴史文化研究所とか，富山県氷見市の家守カフェ有限責任事業組合（LLP）などは，代表事例として注目されています。

これら「新しい公共」や「まちづくり市民事業」などのように，これからのまちと人びとの関わり方は，多様な展開を見せています。

5．まちはひと

最後に，結局のところ，自分たちがまちをつむでいくことが大切なのだということを再度強調しておきたいと思います。

まちは，そこに暮らしている人びとの姿を映しているものでもあると思うのです。そういう意



スライド 22

味で，まちの問題解決を全て行政任せにするのではなく，身近なことに目を向けていくことが求められます。もちろん，人生経験や社会的立場，あるいは所属ごとに，できることの範囲や担えることの大きさ，時間的な余裕の差違などがあるので，できることを適切に分担し，積極的にまちと関わっていくことが必要ではないでしょうか。

まちというのは，わたしたちがつむぎながら未来へ引き継いでいくものです。ただ，現在のように将来が容易には見通せない不安が山積するなかで，どうしても気になるのは「今」であることも事実です。

しかし，それでも「今」だけではなく，「これから」のこともしっかりと考えて，住み続けたい，暮らし続けたいまちをみんなで考えながら，できることから取組んでいくことが必要ですということを，まとめにさせていただきます（スライド 22)。

ご静聴ありがとうございました。

主な参考文献

「まちづくりの百科事典」
…似田貝香門ほか　丸善株式会社　2008
「まちづくり教科書」　第一巻　まちづくりの方法
…日本建築学会編　丸善株式会社　2004
「小樽運河保存の運動」歴史篇
…「小樽運河問題」を考える会編　1986
「小樽運河保存の運動」資料篇
…「小樽運河問題」を考える会編　1986
「小樽運河と石造倉庫群の保存運動から何を受け継ぐか」
…小樽シンポジウム実行委員会編・発行　2009
「小規模集落における地域運営手法の可能性（会津坂下塔寺地区)」
…岩田司　'09年度　日本建築学会　都市計画部門PD論文集
「季刊　まちづくり21　0901」
…学芸出版社　2008